



## ロンドンの博物館を巡って (2) : そぞろ歩いて

著者	池田 勝彦
雑誌名	阡陵 : 関西大学博物館彙報
巻	72
ページ	2-5
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023826">http://hdl.handle.net/10112/00023826</a>

## ロンドンの博物館を巡って（2） ～そぞろ歩いて～

池田勝彦

昨年（2014～2015）ケンジントン地区にある博物館をいくつか実際に訪問して、博物館の「今」を書かせていただいた。「今年も書かせろ」という著者の強硬な姿勢に博物館事務局の方々も仕方なく依頼を送られたと拝察している。それを受け取った著者は我に返って強く後悔をしているところである。「さて、どこの博物館を書こう」、「何にも浮かんでこない」、「これは困った」という状況である。前回の最後に「コベントガーデン辺り」などと書いてあったが、それも含めて考えているが、今ここの部分を書いている時点では「どこの博物館へ」は決まっていない（12月27日）。飛行機のなかで少し考えてみようと思っているところである。博物館だけでなく「美術館」も入ってくるかもしれないが、お許しいただければと思っている。

「行きの機内では何も浮かばなかった」といえば聞こえはよいが、何も考えなかったというのが正しいようである。今、マープル・アーチ近くのホテルの部屋で、どうしようと悩んでいるが、なぜか行動に移ってこないのが困りものである。12月30日 午前10時30分である。外はいつものごとく厚い雲に覆われた重苦しさが漂っている。しかし、街は隣国のテロにも関係なく賑わっている。昨年以上に多いように感じている。しかし昨年と比べて警官さんが非常に多いとも感じている。チューブにも交通機関を専門に警備する警官さんが二人で乗ってきていた。ミュージカルの劇場もまた大きい荷物に関しては中身の確認をしている（どこかでテロがあると始めるようである）。

ようやく訪問する博物館が決まったのが12月31日の朝である。昨年（2014年）は長蛇の列で諦めた自然史博物館（Natural History Museum, NHM）とした。開館時間がわかっていなかったが、まあ10時頃だと考え、TubeのCentralに乗り、Notting Hill GateでCircleに乗り換えてSouth Kensingtonで下車した。この駅はImperial Collegeの最寄り駅なので、在外研究

期間は毎日下車した駅である。在外から20年経ってもほとんど何も変わっていない。いつ来ても「帰ってきた」と感じる場所である。

そこから地下道（Subway）で少し歩くと、NHMがある。昨年同様にスケートリンクが設置されていた（写真1）。Cromwell Roadにメインエントランスがあるが、Exhibition Road側がよいという係員の説明に乗って、そちらから入場することにした。10時過ぎにNHMに着いたが、今年もすでに多くの人が入場待ちで並んでいた（写真2）。約30分待ちという、比較的短い待ち時間で入場できた。もちろん今回もAdmission freeの博物館である。今回メインエ



写真1 自然史博物館の中庭に設置されたスケートリンク



写真2 自然史博物館への入場を待つ人たち



写真3 出迎えてくれていた恐竜（の骨）

ントランスから入場しなかったために、有名な恐竜（の骨）の展示会場でなく、地球に関わる展示場から始めることとなった。それでも恐竜（の骨）の展示で出迎えていただいたが（写真3）。地球の生き立ちを地学的（地球物理学的）な立場と生物学的（人類誕生についても含まれている）な立場で、時間軸であらわす展示は興味深いものであった。地球に関わることであるので、火山や地震（プレート移動を含めた）の展示にも力を入れていた。阪神・淡路大震災に関する展示はコンビニエンスストア（表示は神戸スーパーマーケット）のような陳列棚を作り、その床面が揺れるという比較的規模の大きい経験型の展示を行っていた（写真4、5）。また、東日本大震災については、「津波」というテーマで取り上げ、そのニュース映像を流している。さらに、発生時間に止まった時計（写真6）も展示している。「生々しい」ものの展示ではあるが、見学者を見ると体験者でないからやはりピンときていないように思えてしまう。次は鳥やCreepy Crawlies（気持ち悪いはい回るもの、ムカデなど）、さらに海に生息する爬虫類の展示となる。あまり気持ちのよいものではなかった。さらに、同ゾーンで鉱物と宝石の展示がある。金属系の研究者にとっては「鉱物」はお友達感覚なので、展示も期待したが、期待以上ではなかったというのが正直なところである。したがって写真に収めるものでもなかった。

次にメインエントランスのゾーンになった。入り口にドーンとディプロドクス（の骨）の展示がある（写真7）。それを見下ろすようにチャールズ・ダーウィンの白い大理石座像がある

（写真8）。ダーウィンがここに座して、今何を思っているか知りたい気がする。

エコロジーに関する展示もあり、3R (Reduce, Reuse and Recycle) の具体的な行動についても展示があった。これはとても分かりやすかつ



写真4 地震体験施設の表示「神戸スーパーマーケット」



写真5 地震体験施設に展示されているマーケット商品



写真6 東日本大震災の津波で被災した家の時計とカレンダー



写真7 メイン・エントランスでお迎えするディプロドクス



写真9 NHMの外観（2014年と同じ）

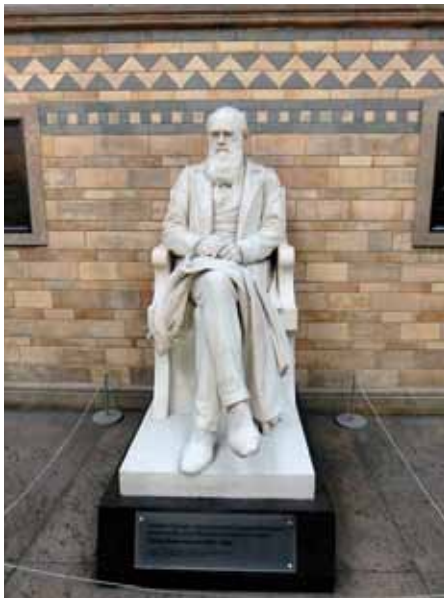


写真8 入場者を見下ろすダーウィン

たので、本学の理工学系に展示場ができるのであれば、展示したい内容である。海で行われている壮大なリサイクルシステム、植物の葉で行われている光合成や食物連鎖なども比較的わかりやすく展示されていた。

日本にも多くの自然史博物館があり、大阪市にも長居公園内にあるようである。本訪問記の著者は日本の自然史博物館を訪問したことがないので、ロンドンのNHM（写真9）と比較できる能力はない。日本でも「よい展示」が行われていると思うが、やはり無料入場を心がける必要があるかと思う。訪問者の寄付に期待して行ってみては！

「コベントガーデン辺り」には「ロンドン交通博物館」がある。Admission Feeは16ポンド

と安くない。SHOPには入ったが、博物館施設には入場していない。コベントガーデンに今回行くことにしたその理由はROYAL OPERA HOUSEに行くためである。一応OPERAを観るという目的である。今回の訪問記の趣旨とは異なるので、内容を詳細に記述することは避けるが、建造物としてはとてもよいので、博物館・美術館感覚で訪れることをお勧めする。OPERAはTicket Feeが高いので、BALLETをお勧めする。Christmas SeasonであるとThe Nutcrackerが上演されていることが多い。子供が耐えられる最長時間の90分の作品なので特におすすめである。お時間に余裕にない方は2幕のみ（30分程度？）でも十分に楽しめる（この作品で聴くべき曲は2幕に集中しているのだ）。

今回は博物館が一か所で、美術館を回ることもできなかったのもので、博物館でも美術館でもないが、建物自体が博物館か美術館に展示される価値があると思われるものとしてThe Ritz Londonも紹介したいと思う。The Ritzはパリ（セザール・リッツ創業の1号店）とロンドン、マドリードの3か所しかない伝統的なホテルであることはご承知であろう。現在、マリオット・インターナショナルの傘下にあるRitz-Carlton Hotelとは別物ものである。創業が1907年5月24日で、グリーン・パークの横に建っている。建物内の歴史と高級感を感じることができる。壁はすべて白を基調とし、金色で装飾がなされている。ただし、現在のホテルとしての機能は皆無で、車いすなどで移動することがとても難しく、その旨はホテル自身公表している。特に

クリスマスシーズンはきらびやかで、日本では見かけることができない雰囲気を感じることができる。部屋も白を基調に、金色の装飾は変わらない(写真10、11、スーツケースが邪魔で申し訳ございません)。ファイアー・プレースもあり、照明も豪華である。今回はバスルームに段差がなかったが、部屋によってはバスルームに段差があることもある。趣味で泊まるにはよいが、一般向けのホテルではないように思う。これでは営業妨害となるかもしれないので少し補足しておく。19世紀末から20世紀初頭のヨーロッパの歴史に触れることのできる建物ではある。

2015年と2016年の2年続けてロンドン博物館訪問記を書かせていただいた。では2017年であるが、2016年の年末にロンドンを訪れるかどうか分からないというのが正直なところである。1995年の在外から2016年まで20年間に亘ってロ

ンドンの定点測定をしてきたが、「もうよいか」という気がしてきている。ロンドンの雰囲気も変化してきており、それ以上に著者自身も変化してきているのであろう。何が違ってきているかをこの1年間熟考して、答えが出たときに、再度訪問するかどうか決まるように思う。もし訪問するとなればまた書かせていただければと思っている。ただ、事務局も読者の方々も「レッドカード」を高々と掲げているように思えるが…?

---

博物館運営委員 化学生命工学部教授



写真10 ザ・リッツ ロンドンの室内  
(ファイアープレース)



写真11 ザ・リッツ ロンドンの室内  
(リビング)